

「東海道宿村大概帳」(1)

西羽 晃

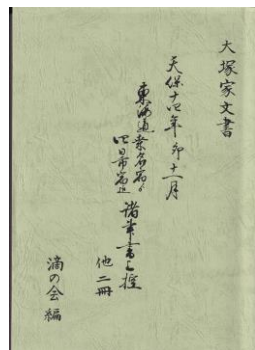
江戸時代は東海道をはじめ国内の主要な道路は江戸幕府の直轄道路（即ち現在の国道）でした。この道路の状況を知るために、幕府は各藩に命じて、天保14(1843)年現在の状況を調査して報告させました。それをまとめたのが「東海道宿村大概帳（とうかいどうしゅくそんだいがいちょう）」(以下「大概帳」)です。その原本は現在は不明ですが、写本が「郵政博物館」に所蔵され、その活字本が昭和45(1970)年に吉川弘文館から発行されました。

「大概帳」の内容は各宿場ごとに宿高、人口（男・女）、家数、本陣の規模、旅籠数、寺社、隣の宿場までの人馬（船）賃銭、河岸、産業、京都へ向けての次の宿場までの沿道の村々の状況・橋梁・一里塚・立場（休憩所）・掃除の担当村など多岐にわたって記録されています。

幕府に提出された控えと思われるものが桑名に2冊現存しています。

一は鎮国守国神社所蔵の「東海道桑名宿」（以下「鎮国本」）で、桑名市教育委員会編集・発行の『桑名藩史料集成』（平成2＝1990年）に活字化されています。

もう一つは川越町の大塚家に所蔵されています。「東海道桑名宿より四日市宿迄 諸事書上控」で、「滴の会」が解読した印刷本（以下「大塚本」）が平成19年に「滴の会」から自費出版されています（写真）。



「大塚本」では、天保 14 年 11 月 14 日に大福村庄屋・梶嶋策三郎、天ヶ須賀村庄屋・水谷二兵衛、豊田一色庄屋・大塚桂蔵が桑名城内に呼び出され、「幕府から街道を調査するよう」に指示があり、その調査係に命じられました。調査の結果を報告しましたが、控を取っていませんでしたので、文久 2（1862）年に桑名藩にある控を借りて写したものです。

「鎮国本」は元々は何処にあったか不詳ですが、「御役所ニ而御仕立本紙之写 天保十五辰年」とあり、桑名藩が仕立てた本（幕府へ提出したものか？）を写したものでしょう。

「大概帳」、「大塚本」、「鎮国本」とも内容に大差はありませんが、細かく見ると、書き写し間違いを除いても、若干の違いが見られます。冒頭の部分で「桑名宿は町人であって、農地を耕すことができないので、貞享 3（1686）年に領主に願い出て百姓に任せることにした」（意訳）の文言は「大塚本」「鎮国本」にはありますが、「大概帳」では省かれています。

大人数の行列の場合は旅籠屋では不足しますが、その場合に寺院を借ります。「大概帳」では光徳寺、十念寺、浄土寺、本統寺、法盛寺は休泊が可能とされていますが、「大塚本」「鎮国本」では浄土寺のみ休泊可能で光徳寺、十念寺、法盛寺と顕本寺は広いけれど、休泊は受けないとしています。また本統寺は記載がありません。桑名地元では「受けない」と報告したのに、幕府から再度の要請があったのかもしれませんが。

その他にも細かな点が見受けられます。